

GSID

Discussion Paper No.214

メディア・イベントとしての北海道「探検」

東村岳史

June 2019

Graduate School
of
International Development

NAGOYA UNIVERSITY
NAGOYA 464-8601, JAPAN

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院国際開発研究科

1. はじめに――なぜ探検か、なぜメディア・イベントか

本稿では、戦後北海道の空間認識と時代認識のあり方を「探検」を手がかりに考察する。一般には、探検という言葉には、未知の土地への憧れや、危険とその克服といった、ロマンティシズムやエキゾチシズムにまつわるイメージがともなう。大航海時代以後、西洋諸国がアジア・アフリカ・アメリカを植民地化していった過程における先導者の行動がそうである。もちろんそれはある時期までは「文明化の前進」として語られたが、その後「帝国主義の先兵」として批判されるようにもなった。在地住民の存在や権利を無視し「無主の地」として占領・植民地化する行動が「探検」に付随することがあったからである。行為にこめられた意味合いの変容は時代認識を示すものでもある。

では、空間認識としてはどうだろうか。西洋にとってのアジア・アフリカ・アメリカは、海の向こうの明白な異域であった。それこそが探検の対象である。ある土地を探検の対象としてまなざすのは、明らかに外部者のものである。では、北海道を探検の対象としてまなざすのはだれの欲望なのだろうか。

菅江真澄、間宮林蔵、松浦武四郎らは、江戸時代後期から幕末にかけて「北方地域」を歩いた旅行家・探検家として名高い人物たちである。なかでも松浦武四郎は、アイヌの理解者としてそのヒューマニスティックな旅行記を参照する書き手は少なくない。ただ、彼らの人気は、北海道がまだ蝦夷地として異域であった時代に困難な道を歩いて他者（アイヌや他の北方少数民族）と交流したという、「未知との遭遇」イメージに彩られていることもまた否めないだろう。

このように、蝦夷地あらためて北海道を「探検」の対象としてとらえる視線は、前近代期の外部者のそれに由来するものと思われる。この場合、探検の対象となる土地は「生活の場」ではない¹。そこで、「探検」に引き続き、その地を「生活の場」として作り変えていく行為が要請される。それが開拓（開発）である。この二つの行動に連続性を見て取るかぎりにおいて、「探検」と「開拓」は親和的である。「探検」は「開拓」に役立つ必要不可欠なものとして先行する行為と見なされ、正当化される。仮に探検者自身はそう意図していなかったとしても、「開拓」という

目的が正当化されることによって「探検」も社会の中で正当性を持つ行動として認知されるのである。

「探検」と「開拓」が親和的であるのは、行為の連続性においてのみではない。おそらくはその精神性において、二つの行為を結び付けて賞賛する集合心性（社会意識）のようなものが存在する。カタカナで「フロンティア・スピリット」と書く方がぴったりするかもしれない。この「フロンティア・スピリット」は、未知の領域に足を踏み入れる（探検）と同時に生活の場・領地として手を加える（開拓）——日本語では「探検精神」と「開拓精神」の両方をあわせもった言葉としてここでは用いている。その挑戦者の意気込みを高く買いそれに酔う心性は、「文明」や「進歩」と親和的であり、かつ神話的でもある。

もう一つ「探検」と親和的なのが「学術」である。「探検」とは（「高貴な野蛮人」の）征服という野蛮な行為ではなく、未知の事柄を解明し既知の事柄へと転換していく高度に知的でチャレンジングな行為であると見なせば「高貴な義務（ノーブレス・オブリージュ）」であり、その使命感が「フロンティア・スピリット」同様、精神的尊さとして賞揚されるだろう（反対に、墮落した「探検」は非難的となる）。ある種の学術調査はしばしば「学術探検」と銘打たれもした²。

「探検」が「開拓」や「学術」と親和性があるということは、「開拓」や「学術」の進展にともなって主体や内容に変化が生じる可能性がある。すなわち、当初は外部者によってまなざされる対象だった北海道が、次第に内部者（住民）にもまなざされ働きかけられる対象へと移行していくということである。戦前から戦後になると、外部から北海道を探検したいという欲望も存続する一方で、道内在住者が自らの「郷土」の「内なる異域」として「辺境」をまなざす様子も見られる。それは『旅』の紙面で「地の果て」と名づけた外部者の目線と重なる部分はあるもののやや異なり、以前は自らの「郷土」の領域外だった地理的範囲を北海道全体に拡大していく動きではないかと私は考えている。

その動きをとらえるために、本稿ではある新聞社が仕掛けたイベントを取り上げる。メディア・イベントには様々な対象が含まれるが、ここでは吉見俊哉の簡便な整理にならい、さしあたり「メディアが主催するイベント」「メディアに媒介されるイベント」「メディアによってイベント化される現実」の三層に分ける（吉見 1996）。本章で扱うのは一番目の「メディアが主催するイベント」としての「探検」で、それが同時代の「現実」の中でどのような意味を持つのが考察の焦点である。以

下では、同時代の探検の受容のされ方を概観し、その後「探検」イベントの顛末を追うことによって、北海道在住者の北海道認識の一端を時代性ととも浮かび上がらせたい。戦後においては北海道ももはや素朴な意味での探検の舞台たりえなくなってくるのだが、そこで「探検」の意義はどのように認識されていたのだろうか。その中では、アイヌ民族がどのように可視化／不可視化されているのかも論点の一つとなる。

2. 戦後期の探検論と開拓・開発

2.1 松浦武四郎の顕彰

上述のように「探検」と「開拓」が密接に結びついた例を、高倉新一郎の編著『開拓と探検』という題名の書籍に見ることができる。開拓に先立ち「未開」の地は探検によって地理風土等が明らかにされねばならず、その代表例として高倉もまた「北海道の開拓に関連させての探検家といえば松浦武四郎である。…折ある毎に北海道の価値と重要性をと、現実の開拓策に対して種々の勧告をなし、明治維新となるや起用されて判官となり、国郡を分け、道、国、郡名を付する案を立て、北海道の名付け親と呼ばれた松浦武四郎である」（高倉 1971: 17）とその名をあげている。この本が取り上げているのは「近代日本の形成における探検・開拓の意味」であるが、過去の探検の意味づけを回顧すると同時に、同時代における「探検」の意義付けが求められていたというのが1960年代から70年代の展開であるといえるだろう。開拓（開発）推進のための探検である。松浦武四郎はその先駆者として位置付けられるわけである。

では1950-60年代にかけて松浦武四郎がどのように受容されていたかを見ておきたい。『北海道新聞』1957.10.16「松浦武四郎を賛えよう」は市立函館図書館長の元木省吾が寄稿した一文である。元木は、「翁の探検が本道全般にわたり、その調査や意見が本道開拓の基礎となった」という理由で、翌年に予定されていた北海道大博覧会（札幌・小樽）と函館開港百年祭で松浦の功績を取り上げられることを切望すると書いている。また、場所がどこかははっきりしないが、松浦の「来道百年記念碑建立計画の手紙ももらっている」とし、記念事業の計画推進の機運が生じていることも述べている。元木が言及したように、現在道内各地には彼を顕彰する碑や像が数多くある。そのうち、1950-60年代に建立が確認できるものが少なくとも三つある。厚真と釧路、砂川である。

このうちもっとも人目につきやすいのが釧路に建てられた松浦武四郎の銅像であろう。『読売新聞』北海道版1957.6.18「阿寒“生みの親”松

浦翁の銅像」によると、函館を中心に松浦武四郎の顕彰運動が起こっていたが、函館より先に釧路に銅像が建てられることになった。阿寒国立公園観光協会が中心となって東京の制作者に依頼した像はすでに55年に釧路に届いており、場所と台座の建設費の捻出が問題となって保管されたままであったのが、ようやく日の目を見ることになったものである。そして翌58年8月には各紙で釧路市公民館前の高台に銅像が設置されることが報じられた。なおこの年は松浦がクスリ場所を訪れてからちょうど百年にあたっていた（『読売新聞』北海道版 1958.8.22「“開拓の親”松浦翁を顕彰／釧路「探検記」100年を記念」、『毎日新聞』北海道版 1958.8.28「開拓の先駆者松浦武四郎の銅像」、『朝日新聞』北海道版 1958.8.29「ようやく日の目／探検家松浦武四郎の銅像」）。正面から見ると、向かって左側帳面に書き付けている松浦像の右に、膝を折って前方を指差すアイヌの老人像である。新聞記事でも記されているように、松浦はまさにアイヌを従えた格好になっている。

碑文は以下のとおりである。

北海道及び釧路の名付親 松浦武四郎は幕末に未開の地蝦夷探検の急務を説き一身を賭して苦難と闘いアイヌ民族の協力を得て東西蝦夷山川地理取調図等蝦夷地開拓計画の基礎資料を作成し為政者に供して諸種の献策を行いその促進をはかる

安政五年（一八五八年）阿寒国立公園地帯を探查して久摺日誌を記述せしより百年目に当りクスリ酋長メンカクシの砦址たりしヌサウシチャシコツに像を建て北海道開発先覚者阿寒の父として永えに顕彰せんとするものである

昭和三十三年（一九五八年）

阿寒国立公園観光協会

釧路市公民館長 丹波節郎撰

北海道学芸大学教授 山口野竹書

（旧漢字は新漢字にあらためた）

1970年に旭川に建設された「風雪の群像」の岩に腰をおろしたアイヌ像が問題となり論争を巻き起こしたのに対し、釧路の松浦とアイヌ像については問題視された形跡が管見では見当たらない（杉山 2010：425も同様の指摘を行なっている）。そのような時期ではなかったといえればそれ

までだし、また一般に「アイヌの理解者」という松浦武四郎のイメージもあって、特にとがめられることもなかったのかもしれない。

残りの二つの碑についても見ておこう。『北海道新聞』胆振日高版1957.11.14「松浦武四郎の記念碑／厚真村に探検百年を記念建立」はタイトルのとおり、釧路と同様、当地への「探検百周年」を記念し郷土研究会員が発起人となって完工したものである。『北海タイムス』1964.9.11「開拓の功績を永遠に／松浦武四郎翁踏査の記念碑完成／郷土愛、見事実る」は砂川郷土研究会が中心となって建てられた記念碑を報じたものである。松浦は「本道開拓の大恩人」と形容され、彼の功績は「郷土副読本『すながわ』に“砂川の夜明け”としてのっ」たそうである。この2例では「探検」の対象として「踏査」された地が「郷土」として“成熟”したことが看取できるだろう。

同じころ、吉田武三『評伝松浦武四郎』という書物が刊行されている。非売品で限定三千部と多くはないが、歌人の佐々木信綱、アイヌ語研究者の金田一京助、北大教授の高倉新一郎、北海道知事の町村金五、三重県知事の田中覚と著名な研究者・政治家が序文を寄せている。権威付けと普及促進をかねた一冊といえよう。著者の吉田によると、「昭和三十二年に、北海道の新聞に松浦武四郎を主人公に二百回」連載小説を書いたのが評伝のきっかけで、釧路の武四郎像除幕式に参列してほしいと釧路市公民館長丹波節郎から依頼されたそうである（吉田 1963: 11）。

このように、地味な動きではあるが、「百周年」前後を記念する形で松浦武四郎の功績をたたえる表象は拡大される傾向にあった。松浦が「開拓の先駆者」として北海道各地の「郷土」化の先鞭をつけた人物という評価が固定されるほど、「探検（家）」の地位は揺るぎないものになっていく。そして松浦の探検「百周年」に続くのは「開道百周年」である。

2.2 同時代の探検論

ここで北海道外も含めた同時代の探検論を概観しておきたい。中心となるのは主に文化人類学者たち論者で、「はじめに」で述べた探検と学術の結び付きがポイントとなる。

日本民族学会（現日本文化人類学会）の学会誌『民族学研究』に掲載された論考の対象地域別数を分析した関本は、「人類学の遠心性向」を見出している。戦後20年余の間、「植民地を喪失し、国外での調査の機会も政治的環境や資金の制約から奪われていた時期に、日本人類学が遠心性向をとりあえずぶつけていた対象が、沖縄・奄美、そして北海道のア

イヌだった」(関本 1995: 139)。この論考では「探検」という言葉自体は用いられてはいないものの、「遠心性向」という表現には(自分にとって)未知の手付かずの地域を目指すという探検に近い心性が込められているといえよう。そして1950年代半ば以降は、マスメディアの後援を得たりしながら、「海外学術エクスペディション(探検)」が拡張されていくようになる(飯田 2007)。後述する梅棹忠夫や本多勝一も、この1950年代にヒンズークシ・カラコルム地域の探検調査を行ない、著作を発表している。梅棹や本多は、「海外学術エクスペディション」の経験を元に探検記や文明論を著した後、まだ人類学の「遠心性向」が残っていた時期に北海道の探検についても論ずるようになるという軌跡をたどっている。また、本多が在籍していた京都大学に「探検部」が創設された(1956年3月)(本多 1975: 236)のをはじめ、他大学にも広がっていったようである(注2参照)。

本多が1960年代に書いた文章によると、海外に出かける探検隊・調査隊・登山隊などの急増は「探検ブーム」と一種揶揄的にとらえられていたようだ(本多 1975: 235)。本多自身は、日本人の異民族接触経験の増加という観点からこの傾向を肯定しているものの、この一文が「探検の大衆化時代」というタイトルになっているように、探検が急速に通俗化していく傾向があったことも否めない。探検が観光旅行とそれほど差がないものになっていく。つまり、この時代の探検論については、観光旅行が急速に大衆化していった影響がやはりあるだろう。もともと「旅」という言葉自体も「探検」に近いハードな行動を含んでいるが、その側面が「探検」と関連してイメージされると同時に、少数の鍛えられた、金銭的・時間的余裕に恵まれた人々にのみ訪れることが可能だった「秘境」へと移動し見聞する楽しみが庶民にも手の届くものになってきた時代である。「探検」や「秘境」の意味合いは以前と比べて軽くなっていくと同時に、庶民化された「秘境」の対象が求められもする(岡田 1960)。知床などはその代表例といえよう。

さて、前著(東村 2008: 第8章)でも引用したように、戦後の北海道のあり方に関わる論考として反響を呼んだのが、梅棹忠夫の「北海道独立論」である。「北海道独立論」を含め、『中央公論』に連載した論考から最初の4回分を加筆修正したものが梅棹忠夫『日本探検』(1960)としてとりまとめられた。梅棹の一文で留意すべきは、「探検」というタイトルがついてはいるものの、主眼は開発論であるということである。『文明の生態史観』からの延長で日本を振り返り、北海道の開発の実情および

将来展望を示してみた、という位置づけになる。

梅棹は執筆の動機についてこう説明している。

わたしは、いままでどちらかというところ、国外での未開民族の人類学的探検こそは、じぶんのなすべき仕事であると思い定めて来た。しかし、何度かの学術探検隊に加って各地を旅行するうちに、問題は未開地・未開民族にかぎらないことに気がついた。よく知られているはずの民族や社会にも、あたらしい見方に立って、考えなおすべきところがたくさんある。わたしは、じぶんの意識を比較文明論というところからまで拡大し、すべてを人類史の大きな流れのなかにおいて理解できるようにしたいとのぞむようになった。(梅棹 1960: 268)

実際この本で取り上げられているのは、福山・大本教・北海道・高崎山と性質もばらばらの対象であり、「探検」の名が付されているからといって「未開地・未開民族」扱いされているわけではないとはいえる³。ただ、そうはいっても、前著で述べたように、北海道在住者から見れば、外部者である梅棹が駆け足の印象で記した内容はやや表層的という感じを抱かせるものでもあった。そして(それゆえ)梅棹という外部者に「探検」されることによって、北海道在住者による「内発的文化論」を引き起こしたことになる。

梅棹に続いて「探検」を冠した書物で「北海道」を扱ったのが、梅棹に影響を受けた本多勝一である(本多 1985[1965])。駆け足の短い滞在だった梅棹とはやや異なり、1959年から62年にかけて朝日新聞北海道支社で勤務していた本多は、自然環境や開拓者の生活の厳しさを具体的にルポルタージュとして描いている。本多もまた、「標題は『北海道探検記』となっていますが、その名に真にふさわしいものはむろん幕末の大探検家・松浦武四郎の記録でありましょう」と述べ、「松浦武四郎と比肩するような大それた意味ではなしに、ここでは一種のユーモアやアソビとして、京都探検や新宿探検・ニューヨーク探検といった意味も含めた「探検記」にしたつもりです」(本多 1985: 351)とタイトルの趣旨を明かしている。「ユーモアやアソビ」とあるが、ハードな踏破行記録も含まれ、後述する北海タイムスのイベントにも間接的に影響を与えているのではないかと思われる。

梅棹と本多の共通点として、二人ともパイロット・ファームを主要な考察の対象として取り上げている。二人は同じ時期に北海道大学の研究

者（「根釧開発地域踏査隊」）に同行している。本多は最初に出版した探検記で、探検を「その時代における最も現代的なもの」と定義しており（本多 1958: 241）、その観点からは、パイロット・ファームこそ当時の開発の最前線であり、最前線を見ることが、たとえ洒落の意味合いであったにせよ、同時代における探検としてふさわしいということになる。そしてこれも両者に共通することとして、入植者の「サラリーマン」氣質を強調している。梅棹はその性向を「非難する気持ちも毛頭ない」といいながら、「現代の日本における最大の開拓地にあるものが、もっぱら官僚体制内のバランス・シート主義であって、個人のレベルにおける開拓者精神でないとすれば、これは、開拓史上かなり注目に価する現象ではないか」と述べる（梅棹 1960: 141）。本多もまた非難はしていないが、「青年たちの理想として一様にきかれた声は、パ・ファームがサラリーマン的生活になることである」と紹介している（本多 1985: 130）。ここからうかがえるのは、「探検」する主体側はもはやかつての「未開」の地ではない開拓地への入植者に「開拓者精神」の欠如を見てとりどこか違和感をぬぐえない、といった心情である⁴。いわゆる「未開」の地などではないパイロット・ファームの訪問は、かつての意味での探検ではなく、「ユーモアやアソビ」としての「探検」にすぎないにもかかわらず。

『北海道新聞』1959.6.23「観光地的な大賑い 根釧パイロットファーム／押しかける視察者」は、そのタイトルのとおり、「七、八、九月の夏休みシーズンには昨夏の皇太子視察によるピークの月平均六千人を突破しそうな勢い」の訪問客の動向を報じている。この点は本多もふれていて、もし訪問者が見学コースをファーム関係者にまかせたならば、「パイロット・ファームとは、かくもスバラシイ文化生活なのか！」と思うに違いないと述べている（本多 1985: 123）。しかし、それは表層的「観光」にすぎず、実態を掘り下げて見る（学術的）行為が「探検」の名に値するということになる。

大航海時代的な意味合いでの「探検」が成り立たなくなっている中で、「探検」にどのような意義を込め評価するのか。それは以下で考察するメディア・イベントでも模索されたことであった。

3. 新聞社のメディア・イベント——北海タイムスの「北海道探検隊」

『北海タイムス』1966.5.21「一日一言」（市川謙一郎）によると、「開道百年」と北海タイムス社創立20周年を記念したイベントが「北海道探検隊」である。1チーム5人からなる10チームを選抜し、8月1日本社

前を出発し 10 日以内に札幌へ戻る日程で参加者を募集するというものである。

そういえば本道にはまだまだ人跡未踏の秘境がたくさん残っている。どこもかしこも観光ブームで開発しつくされているようだが、一步コースをはずれると千古の密林が多く学術的にも産業的にも探検の価値ある対象となるとところが意外に多い。最近、出版された『北海道探検記』(本多勝一)にも「ほんとうの北海道は、観光ブームにわく湖や峠や温泉にはない」と述べ「私はへき地の部落にはいりこみ、そこに住む人々の生活の実態にふれながら、改めて日本人とは何か、その原質を問おうとした」と述べている。過酷な自然の中の人間性を追究しようという意味だろう。この人は夏と冬との知床半島の探索に始まって、北海道の無人島の渡島大島、礼文島のスコトン岬、根釧原野、サロベツ原野から冬の十勝岳や羊蹄山などまで歩き回っているが「何かの強い目的でもなければ、こんなバカらしいところは二度と歩く気がしない」とボヤくときもある。

市川は自分の目でたしかめることの重要性を実感したというアメリカ旅行体験に照らして、イベントの意義をこう続けている。

北海道探検もその点では同じことだろう。大切なことは主題の有無だ。開拓百年の歴史をもった本道も広いといってもタカがしれている。大火山がかくされているはずもなければ、人食い人種がひそんでいるわけでもない。それよりも大事なことは、めざす山の向こう、谷の向こうに、何があったか、それとも、何もなかったかを改めて確認するのも探検の意義ある収穫だということである。探検とは未知の世界を解明するための勇気ある行動で、スポーツではない。まず第一にハッキリした目的をもち、第二に計画をたて、第三にはすべて科学的に行動することがかんじんだ。応募者はそれをじゅうぶんに心得て、参加してもらいたい。

この文面では、梅棹の「北海道独立論」に刺激を受けて展開された「北海道文化論」ほど、北海道外の人間への対抗意識はうかがえないものの、道民の、道民自身による、道民のための探検という主旨は読み取れる。梅棹や本多ら外部者の探検論が出版された後、探検する主体としての道

民が立ち上げられたということになる。

そして5月23日の紙面には下記のような小さな囲みの案内が掲載された。

北海道探検隊を募集中
探検地 北海道内どこでも
日時 八月一日一十日まで
編成 一チーム五人以内、七月十日まで。計画書を提出
採否 選考委員会で十チーム決定、七月二十日発表
費用 一チーム十万円支給、探検後レポート提出
賞金 最優秀チームに賞金三十万円。優秀三チームに各五万円
連絡先 (省略)
北海道探検隊事務局

この案内は、「エスキモー探検」と題された連載記事（早稲田大学第二次ベーリングアラスカ遠征隊現地報告）の中に入れられており、わざわざこの記事に合わせてレイアウトされていることは明らかである。

『北海タイムス』1966.6.2「“北海道探検隊”大人気呼ぶ」によると、「“北海道探検隊”は北海道の未知の土地を広く道民に紹介、同時に次代の北海道を背負って立つ若い人々を参加させることによってニューフロンティア精神と行動を植え付けようとのねらい」があり、自衛隊員のチームは20以上におよび、また高校生以上を参加資格としたにもかかわらず中学生からの熱心な参加希望も寄せられたという⁵。ちなみに同記事には知床の写真とともに「開道百年の本道には“秘境”はまだ多い。この知床半島にも数多くの探検プランが練られている」というキャプションが付されている。『北海タイムス』1966.7.20「『北海道探検隊』が決まるまで」は、応募124件の中から選ばれた10チームの紹介と選考経過の解説がある。以下がその10チームである。

×「絶海の孤島で一週間」（松前小島）（北海道教育大学札幌分校美術科学生チーム）

○「積丹山脈の縦走と西海岸探検」（幌別自衛隊チーム）

「増毛半島の沿岸探検」（駒澤大学北海道教養部地理学研究室調査団）

「新冠川上流の自然および社会科学的探検」（静内中学自然科学部チーム）

○「十勝川河口地帯の探検」（札幌市役所チーム）

○「東大雪山系、十勝川源流の探検」（新得山岳会チーム）

×「クマネシリ山塊の探検」(一般混成チーム)

◎「ピヤシリ湿原の探検」(下川小学校教員チーム)

「根釧原野駅通跡の調査」(旭川上川教員チーム)

「風連川流域の探検」(北大理学部大学院生チーム)

(後日の選考会で◎は最優秀チーム、○は優秀チームに選ばれたもの、×は酷評された)

場所が分散しているのは、「同一地域の重複を避ける」という選考基準による。

なお、選から漏れたもので惜しかったものとして、次のような例があげられている。

「日高山脈における十勝、石狩日高アイヌの交渉路の探査」(北大大学院学生)

「狩場山塊」(函館ラサール高校 0B)

「道南日本海岸の秘境を探る」(蘭越町など教員グループ)

「桧山民俗調査」(函館南校教官)

「知床三山縦走」(旭川生物同好会)

「幌尻岳のカール踏破」(北大学生)

「浮島一手塩岱の稜線を行く」(札幌啓明中教官)

「暑寒別山塊」(当別航空自衛隊)

「十勝川源流での野生エゾシカ調査」(帯広畜産大)

これらの「主題」を見てすぐに気がつくことは、「アイヌ」の不在である。惜しくも選に漏れた例の中に一つだけ「アイヌ」がつくものはあるものの、これも「交渉路の探査」という、松浦武四郎の時代を髣髴とさせるような歴史的な主題である。選ばれた10チームの中ではアイヌ関連のものは一つもない。アイヌ民族自体を「探検」の対象とする企画を思いつくチームはさすがにもはやこの時代にはない。選ばれた企画のほとんどが自然環境を対象としていたことからしても、「他者」と出会わないタイプの「探検」である。

探検の結果は、「北海道探検レポート」と題し10月1日から各チーム上中下と3日に分けて連載された。計30日、連日のレポートは1面全体を割いた露出度の大きなものであった。さらに読者には「最優秀チームを投票で決めてください」と呼びかけ、読者の関心を最後まで高めよう

としていたことがうかがえる。審査結果は、『北海タイムス』1966.12.5「みごと、生かされたフロンティア精神／にじみ出る郷土愛」で2ページを使いこれまた大きく報道されている。リード文には「各審査員⁶の総評は『開道百年を記念する画期的な企画。たくさんの応募の中から厳選されたチームだけに、北海道フロンティアの精神がじゆうぶん生かされた。新しく開発される分野、いま調べておかなければ永久に滅びてしまう分野の資料が、実際の行動により解明された。貴重な文献になるだろう』と、各チームの成果が高く評価された」とある。

最優秀に選ばれたのは下川小学校教員チームの「ピヤシリ湿原の探検」である。「冬のスキー以外はその実体がほとんど知られていない山を、自分たち四人の手で見きわめよう」というのが動機で、「探検内容は紹介され地元の市町観光地として立派に通用することを認めさせた」そうである。同時に「まだ人跡未踏の場所がかなりあるため、四人の探検はこれだけで終わったわけではない」とも書かれている。受賞にあたっては下川町長と教育長の談話が寄せられ、町長は「一日も早く観光地として開発を進めたい」、教育長は「未開の山といわれていたピヤシリをわれわれの身近に持ってきてくれたのですから四人の功績は大きい」と語っている。「人跡未踏」の「未開」の地を知に変え「開発」推進に導く、という道筋が凝縮されている。

ただ、「たくさんの応募の中から厳選されたチームだけに…各チームの成果が高く評価された」と書かれているにしては、酷評を受けたチームが二つある。一つは、「“中学生の遠足”のような探検に墮した。探検の要点をつかんでおらず、こういうチームを選考したことは失敗であった」とされ、もう一つは、「自然保護の精神にも欠け、成果にみるべきものなし」とある。「審査員の総評」として、「レポートにやたら探検、探検と書くことより、行動自体が探検の名にあたいしなければならない。こういう面の反省が必要だ」という言葉もある。「厳選」した中で落第点をつけられたのが10分の2とは低い比率とはいえまい。企画を立てた側、あるいは「厳選」した側の「失敗」が問われるのではなく、“安易な”探検チームが責を負わされることになった。「ユーモアやアソビ」と笑ってすますには、まだ“本物の”「探検」を求めていた時代・企画だったといえそうである。

この点は、審査する側と参加する側あるいは読者の側の落差にも関わるともかもしれない。優秀チームに選ばれた新得山岳会チームと幌別自衛隊チームは読者投票のそれぞれ1位と2位を占め審査員の高い評価とほぼ

合致するものの、もうひとつの優秀チーム札幌市役所チームは読者投票では10位と最下位であったし、最優秀チームの下川小学校教員チームも4位とそれほど高くはない。何より審査員からはダメ出しされた北海道教育大学学生チームは5位とそれほど低い読者評価ではない。たしかに北海道教育大チームは学生のたわいもない冒険もどきといえなくもないが、これが読者投票ではこの順位だったのは、近寄りがたい自然にアプローチしていった行程を素朴に描いたのが受けたということであろう。これは読者投票の1位・2位の新得山岳会チームと幌別自衛隊チームのレポートにも共通する点である。対して読者投票最下位の札幌市役所チームにはそういう要素はなく、書き方も控えめである。学術的・社会的な意義づけを求めがちな審査員に対して、読者は理屈よりもわかりやすい冒険譚を求める傾向があったように思われる。

4. 「探検」の後で

これだけ大がかりに紙面を割いて報道しながら、このイベントは1回だけで終わったようである。参加者の中には「開道百年まで、ぜひこの企画は続けてほしい」(『北海タイムス』1966.12.5「みごと、生かされたフロンティア精神」)という声もあり、続けようと思えば続けられたのかもしれないが、それでも長続きはしなかつたろう。「ピヤシリ湿原の探検」の成果として観光開発が語られているように、このようにして「発見」された場所がそれにともなつて人の往来が盛んになるにつれ、探検の対象となる場所が減少していくことは避けられないからである。早晚尻すぼみになったかもしれない企画を続けるより1回で打ち切ったのは、その意味では賢明だったかもしれない。

また、「探検」という言葉自体が、洒落で使うのであればともかく、文字通りの「未開」「未踏」の行動として人を動員する力を失っていく時期でもあった。「厳選」した割に10分の2チームが「探検」の名に値しないとダメ出しをされたというのがその傍証になるだろう。1966年というのは「探検」の動員力が失われる直前で、1回かぎりにおいて成立したメディア・イベントといえるかもしれない。基本的に外部者の視点である「探検」という用語・行為を内部者が「横領」したとして、完全に内部化できるというよりは、外部者的な視点で対象を突き放して見る性質を帯びるものであろう。それよりは、審査員の総評で「フロンティア精神」という伝統(の発明)が「にじみ出る郷土愛」として発現され、「発見」が「開発」と結び付けられているように、「探検」の時代を終えた後

で「郷土愛」とさらなる「開発」が展望されることの方が主催者側にとっては重要であろう。こだわるべきは外部者の視線を引きずった「探検」ではなく、内部的「郷土愛」に基づいた「開発」だからである。この意識は、本州以南を「内地」と呼び裏返しに自らの居住地を「外地」と位置づける「植民地根性」の払拭とも関連する（東村 2006：第8章）⁷。

探検はそれ単独ではなく、開発・開拓と結び付けられてこそ有用である。そしてもはや探検が時代に合わないものになった後では、開発・開拓推進だけが語られればよい。あるいは、今日の開発の意義を考えるに際し、かつての探検に引き続いた開拓への流れが折に触れて思い起こされればよい、ということになる。たとえば、「探検」イベントと同年の1966年に北海タイムス社から『世界の開発と探検 付：日本編』と題した書物が刊行される⁸。社長の竹田巖道による「刊行のことば」では、この書籍が同社の創立20周年記念出版であり、「先人たちの書き残したものを頼りに、血のにじむようなその足跡をさぐるとともに、その後その場所がどのように開発されていったか——それを追求してみた」と述べられている（総合文化史研究会編 1966）。「特集・北海道開発の歩み」では、「未来を約束された北海道」と題して戦後開発事業の将来が展望されている。

探検が過去のものになったということは、探検がもはや賞味期限切れになってしまったということではない。探検は開発の礎石として位置づけられ、不動の地位を占めるようになったとも見なせる。また、もはや“本物の”探検がかなわない時代であればこそ、それを実行しえた時代と主人公がノスタルジーとともに回顧される。松浦武四郎の衰えない人気はそう解釈しないと説明がつかないものである⁹。

1972年に朝日新聞社は『探検と冒険』と題する8巻のシリーズ本を刊行している。編集委員は、加納一郎、泉靖一、梅棹忠夫、樋口敬二、本多勝一の5人である。第1巻の座談会で出席者たちは、探検を「社会派」と「テラ・インコグニタ派」¹⁰に分け、後者は「帝国主義の手先」（向後元彦）と見なされる一方、それを問題視するのが「社会派」という（朝日新聞社 1972a: 398-399）。「社会派」による「テラ・インコグニタ派」の追及がなされはじめた時期といえる。その関連で、第7巻では、宮本常一の著名な「調査地被害」とともに、大城立裕「沖縄調査を調査すると」や萩中美枝・藤本英夫「シャモよ本島へ帰れ——奪われたアイヌの天地」といった、調査・探検される側からの問い返しを主題と

した論考が収録されている。そのような世相を反映して、50年代以降創設された大学の探検部も閉部するところが多くなる。探検は無邪気に実行される時代を終え、一気に反省の俎上に載せられる。

ただし、そのような動向をもって、「テラ・インコグニタ派」の探検が全否定されたわけでもない。朝日新聞の『探検と冒険』シリーズは、編集委員の人選からしても北海道やアイヌと関わりが深い企画であり、第1巻では松浦武四郎も言及される。ただし、前述のように、「アイヌの理解者」イメージが強い松浦は「テラ・インコグニタ派」として糾弾されることはない。そして北海タイムス社の「探検」イベントがすでに他者なき「探検」企画が主流であったため、他者を見る側の視線を反省する風潮からは、対象としても時期的にも逃れていた。「探検」イベントがもはや成立しなくなった1970年代以降に「社会派」による「テラ・インコグニタ派」批判¹¹が強まっていった後でも、松浦武四郎を代表とする先駆的探検家たちの地位は揺るぐことなく、その後も保ち続けられたのである。古典的「探検」が立ちいかななくなった時点は「探検」の意味を再考する契機となりうるが、北海道においてはそのような機運は生じず、相変わらず松浦武四郎をロマン主義的に賞揚する傾向は現在まで引き継がれている。

それにしても思うのは、探検は本物を求めるにせよ、「ユーモアやアソビ」を装うにせよ、つくづくマッチョな行為であり、近代国民国家の枠組みときわめて親和的であるということである。探検論にせよ探検イベントにせよ、女性の影は薄い。注5で言及したように、北海タイムス社のイベントには女性の姿はほとんど登場しないし、イベント外でも探検する主体として参照されるような女性はまずいない。青壮年男性層が「おんなこども」や民族的少数派を排除、もしくは客体視することで成り立っていた探検という営為は、過去のものになったとしても、基本的に支配の歴史を支える土台として北海道の社会意識の中に定着してきたのである。

付記

草稿にコメントいただいた手島武雅氏に感謝したい。

注

¹ 堅田精司は、吉田武三『北方史入門』（伝統と現代社、1974年）の書評で、「北方に生きたアイヌをはじめとする民衆は無視されている。わずか四十三回しか北海道に来ていない東京の人間の書いた北方史だから粗雑。北方

を生活の場でなく、探検する土地と考えている」と批判している（堅田 1974: 65）。ここでの「探検」の否定的意味合いは明らかである。なお、後述するように、吉田は松浦武四郎の評伝の著者である。

² 20世紀以降は人類学と探検が分離したイギリスとは異なり、「日本においては、とくに京都大学においては探検と人類学が密接に関係していた。後発探検国の日本では、探検そのものが二〇世紀になってから盛んになる。そして、人類学的な研究や問題意識も、こうした探検の実践から生まれてきた」と田中（2011: 579）は述べている。

³ ただし、梅棹が「未開地・未開民族の人類学的探検」そのものを否定しているわけではないことには留意が必要である。

⁴ やや脱線するかもしれないが、菊池（2005: 160-71）が批判するような、知床入植者に対する侮蔑的な表現に満ちた調査や報道もあった。

⁵ なお、女性だけのチームの応募もあったそうだが（1966.7.20『北海道探検隊』が決まるまで）、実際に選ばれた中にはないこともあり、女性の影は薄い。探検とは、基本的に「おんなこども」を排除した行為であることがよくわかる。

⁶ 審査員の氏名は以下のとおり。北大名誉教授 犬飼哲夫、探検評論家 加納一郎、北大教授・北大山岳部長 渡辺千尚、北大教授 湊正雄、札幌西保健所技師・北大ヒマラヤ遠征隊員・南極観測隊員 小林年、北海タイムス社監査役 宮田久、同事業部長 太田重吉。

⁷ この場合の特徴は、「他者なき植民地」意識である。つまり、前近代の北方探検家たちが遭遇したアイヌなどの異民族の存在は議論には登場せず、したがって「植民地」にロマンティックな響きはなく、ただネガティブな意味合いでのみ用いられる。外部者の「探検」後は、その土地は根付いた生活の場とならなければならない。そこにいるのはもはや「他者」ではないからである。しかし、自分たちを（「内地」人から見て）「他者」ではなると同定したことは、同時に先住民族アイヌの「他者」性を無視することになっていった。したがって、ここでの「植民地根性」の払拭は植民地主義の克服を意味しない。もっとも、後述する「テラ・インコグニタ」（未知の土地）という言葉自体、先住者の存在を見て見ぬふりをしているという点では連続している。

⁸ 北海タイムス社のみならず、他の複数の地方新聞社から同名の本が出版されているようだ。内容の異同は確認していない。

⁹ たとえば、旧アイヌ文化振興・研究推進機構（現アイヌ民族文化財団）主催の講演会などでも松浦武四郎関係の話題提供がくりかえし現れるし、「北海道の名付け親」として松浦が紹介されるニュースは数多い。

¹⁰ 余談めくが、北大探検部の部報創刊号（1965）のタイトルは「TERRA INCOGNITA」であり、その設立趣旨で「わが北海道大学は、日本の大学の中では、探検と開拓の精神にみちた辺境のカレッジとして出発した特異な歴史を有するものであつた。…われわれのエネルギーの結集は札幌農学校以来のフロンティア・スピリットの正統をつぐものといえよう」と述べる。また、部長の佐々保雄は巻頭言で「探検部のあり方にはいろいろあろうが、未知を求めて止まぬロマン主義的な面とそれを解こうとする科学主義的な面との両面を持つところに特色がある」としている。60年代半ばあたりではまだ「帝国主義」的響きは意識されていなかったようである。

¹¹ そもそも「テラ・インコグニタ派」と「社会派」を対立項として二分できるのかという疑問もありうるかもしれない。本多勝一は、この中では「社会派」と名指されている（もっとも本多自身は「欠席裁判」としてこの命名には同意していない（本多 1972: 23-4））。彼はかつては「エスキモー」や「ニューギニア高地人」「アラビア遊牧民」らを記述する側だったのが、その後「殺される側」に立って記述する側の傲慢さを批判する側に回る。

文献

- 朝日新聞社編，1972a，『朝日講座 探検と冒険 1』朝日新聞社
 ————，1972b，『朝日講座 探検と冒険 7』朝日新聞社
- 飯田卓，2007，「昭和30年代の海外学術エクスペディション——「日本の人類学」の戦後とマスメディア」『国立民族学博物館研究報告』31(2)，
 227-300
- 梅棹忠夫，1960，『日本探検』中央公論社
- 岡田喜秋，1960，『日本の秘境』東京創元社
- 堅田精司，1974，「書評と紹介」『北海道史研究』4，63-68
- 菊地慶一，2005，『もうひとつの知床——戦後開拓ものがたり』北海道新聞社
- 坂田謙司，2009，「北海道の地方博覧会——中央と地方の眼差しの交差」
 福間良明・難波功士・谷本奈穂編著『博覧の世紀——消費／ナショナルリ
 ティ／メディア』梓出版，239-272
- 杉山四郎，2010，『アイヌモシリ・北海道の民衆史——人権回復を目指した碑を訪ねる』中西出版
- 関本照夫，1995，「日本の人類学と日本史学」朝尾直弘ほか編『岩波講座
 日本通史 別巻 I 歴史意識の現在』岩波書店，123-147
- 総合文化史研究会編著，1966，『世界の探検と開発 付・日本編』北海タイムス社
- 高倉新一郎編，1971，『開拓と探検』三一書房
- 田中雅一，2011，「探検と共同研究——京都大学を中心とする文化人類学」
 山路勝彦編著『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の
 歴史』関西学院大学出版会，573-604
- 津金澤聰廣編著，2002，『戦後日本のメディア・イベント〔1945-1960年〕』
- 東村岳史，2006，『戦後期アイヌ民族—和人関係史序説——1940年代後半から1960年代後半まで』三元社
- 北海道大学探検部，1965，『TERRA INCOGNITA』創刊号
- 本多勝一，1958，『知られざるヒマラヤ——奥ヒンズークシ探検記』角川書店
 ————，1972，「ニセモノの探検や冒険を排す」朝日新聞社編 1972b
 所収
 ————，1985，『北海道探検記（改定版）』集英社（初版は1965年角川書店）
 ————，1975，『冒険論 本多勝一著作集 7』すずさわ書店

吉田武三，1963，『評伝松浦武四郎』

吉見俊哉，1996，「メディア・イベント概念の諸相」津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館出版，3-30